

第57回 Society of Toxicology (SOT) 学術年会派遣報告② – Continuing Education Courses に参加して –

奥羽大学薬学部 熊本 隆之

日本毒性学会教育委員会が企画する米国毒性学会 (SOT) 派遣事業として、テキサス州サンアントニオの Henry B. Gonzalez Convention Center で開催された第57回 SOT 学術年会(2018年3月11日～14日:年会, 教育コース:10日)に参加させて頂きました。サンアントニオでの SOT は、2013年に同会場で開催されて以来のようです。



メインエントランス



ポスター会場 兼 展示ブース

指定セミナー「NGS Based Technologies Enable Biomarker Development and Discovery in Toxicology」は NIEHS・National toxicology program の Alex Merrick によるイントロダクションに始まり、高性能化と低コスト化が進み久しい次世代シーケンサー (NGS) を主に活用したバイオマーカー探索として、lncRNA, miRNA, 全エクソーム解析, そしてメチル化シトシンに焦点を当てた研究がテーマでした。化学物質投与の実例に加え, Precision Medicine (精密医療) へのパラダイムシフトが印象的でした。これらの内容につきましては, 2018年の学術年会(7月18日～20日:大阪府立国際会議場)に先立って行われます第19回生涯教育講習会(7月17日)の午前の部でご報告させていただきたいと思います。

「Assessment of Peri- and Prepubertal Developmental and Reproductive Toxicity」は DES の悲劇に始まり, 二世代生殖毒性試験 (OECD-TG416) および拡張一世代生殖毒性試験 (OECD-TG443), 機能観察総合評価法 (FOB: Functional Observation Battery), ゼブラフィッシュを用いた試験法, そして生殖発生毒性試験のデータ解釈および信頼性に関するセミナーでした。

SOT 全体としては, 米国での医療用大麻の現状 (テキサスでは 2017 年に合法となり産業化) や地球温暖化に伴うアフラトキシン生息域の範囲拡大, FDA による食品中ヒ素の見解, アフリカ諸国での有害廃棄物の不法投棄の現状など, 国内ではあまり触れられないテーマが印象的でした。

最後に, SOT 参加という貴重な機会を与えてくださいました日本毒性学会教育委員会の諸先生方, 事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



会場近くの名所, リバーウォーク